

第 47 回 日本言語文化学研究会 2013 年 12 月 7 日(土)

第 47 回 日本言語文化学研究会 2013 年 12 月 7 日(土)

第 1 分科会報告 崔 娉

(司会:岩田夏穂、記録:崔 娉)

第 1 分科会では、以下 3 件の発表が行なわれました。

◆ 「地域日本語教育における持続可能に生きる力の養成を目指した教室活動ー初級者の認識の言語化と深化に注目してー」

持続可能に生きる力を養成することを目指した教室実践において、日本語初級レベルの非母語話者は自身のグローバル化社会に対する認識をどのように言語化していたか、またこの認識をどのように深めていったかを明らかにしようとした研究である。共生日本語教育実習に参加した日本語初級レベルの非母語話者 1 名の発話に注目し、談話分析の手法を援用した質的分析を行った結果、この実習参加者は、①相手のスキーマにない認識を相互交渉を経て伝える、②同じ問題を持つものとして対等な立場で実習生などと議論するということが分かった。この結果を踏まえて、認識の言語化と深化を促す関係作りを工夫する必要があるというような地域日本語教育への提言もいくつか出された。

◆ 「即興スピーチにおけるピア・フィードバックの効果ーベトナムのハノイ大学の場合ー」

ベトナムの日本語学習者の即興スピーチに対して、ピア・フィードバックは効果があるかどうかを検証した研究である。実験期間中にスピーチの評価がどのように変化するか、ピア・フィードバックでのやり取りがどのように質的に変化するかの 2 点を明らかにするため、1 組の学習者のデータに基づいて分析を行った。その結果、即興スピーチにピア・フィードバックの効果が見られたほか、ピア・フィードバックの質に変化も見られたということが示唆された。フロアから、実験デザインにより、この研究を量的研究として扱うのではなく、単一事例研究として分析を試みたほうがいいのではないかという研究方法に関する指摘があった。

◆ 「『私のスタイル』の構築過程に関する考察ーある中国人留学生の十年の振り返りからー」

日本語を学ぶことは、言葉の習得だけではなく、他者との関係性の構築、自己実現などにも関係する行為であるという知見を踏まえて、待遇コミュニケーションという観点から 1 名の中国人留学生へのインタビューを質的に分析した。分析の結果からいくつかのカテゴリーを抽出した。また、今回の発表では「私のスタイル」というカテゴリーに注目し、このカテゴリーにどんなコア概念が含まれているかについて詳細に紹介した。さらに、この事例は他の留学生への啓発材料となるのではないかという実際の応用についても言及した。フロアから、外国環境では、本研究の結果をどのように活用できるかという質問があった。



第2分科会では、以下3件の発表が行なわれました。

◆ 「日本語・台?語における連語の対照研究—生産性動詞(生産動詞)と物動詞との組み合わせを中心に—」

1. 日本語の「生産性動詞と物名詞との組合せ」: 奥田(1960: 連 153-161)によれば、「物に対する働きかけ」を表す連語は、A 模様替え、B 取り付け、C 取り外し、D 場所変え、E 触れ合い、F 作り出しの六つに分けられる。また、奥田(1968-72: 連 24-40)では、F 作り出しの命名が異なっており、「結果的な結び付き」と命名されている。例えば、築く、こしらえる、炊く、建てる、作る、煮る、縫う、設ける、沸かすなどの「生産動詞」が挙げられ、それぞれの生産動詞は二単語、連語形式や三単語の形で表すことができる。
2. 台閩語の「生産性動詞と物名詞との組合せ」: 台閩語では、創(作る)、造(作る)、做(作る)、起(建てる、起こす)、挖(掘る)、搭(建てる)などが「生産動詞」として挙げられる。また台?語の「生産動詞」は二単語の組合せ、連語形式や三単語の組合せの形で表すことができる。
3. 日本語・台閩語における「生産性動詞と物名詞との組合せ」の比較: 日本語では、「結果的な結び付き」を実現する連語は、奥田(1960)も奥田(1968-72)も二単語の組合せと三単語の組合せで表している。それに対して、台?語では、「作出物組合」を実現する連語も「二単語の組合せ」と「三単語の組合せ」で表している。これら「二単語の組合せ」や「三単語の組合せ」で表している両言語の中には、対応できるものもあるし、対応できないものもある。

◆ 「教科・母語・日本語相互育成学習支援」を行った母語話者支援者の課題—支援記録の縦断的分析より—

母語話者支援者の当該モデルをめぐる内省の変容プロセスを明らかにすることを目的とした研究である。母語話者支援者はどのようなスタンスで臨んでいるか、母語話者支援者はどのような課題を立てているかを研究課題とし、全23回分の支援記録を縦断的、質的に分析を行った。その結果、教師としてのスタンスで臨む時は、技術的・形式的な課題を設定していること、教師としてのスタンスが立ち行かなくなった時は、関係の再構築を行う模索段階が見られること、対等な学び手としてのスタンスに立つときは、内容重視・思考力重視の課題を設定していることや、子どもの置かれている状況に即して子どもの人生に寄り添うスタンスが見られるということが分かった。

◆ 「北米補習校における動向: 学習者の変化に対応した教授法とは」

プリンストン日本語学校を事例とし、アメリカ及びニューヨーク近郊の日本語学習プログラムの現状と日本人コミュニティが直面する主な教育問題とは何かについて紹介した。対象となる学習者は日系アメリカ人の児童・生徒である。文科省とは関係なく独自に運営されているプリンストンコースの特徴は、継承語としての日本語教育を行うことを目的としている点である。それに対して、文科省カリキュラムは、学習者が駐在員家庭の児童・生徒であるため、帰国後に日本の教育制度にスムーズに適應させることが目的になっている。また、文科省によって正式に認可された補習校も同様の特徴をもつ。このような駐在員家庭と日系アメリカ人家庭の児童・生徒の異なるニーズに対応するには、新たな補習校のモデルと教授法が必要だと考えられる。まず、「民族言語」コミュニティという概念を問い直す。また、日本人補習校の従来の慣習を改革する。つまり、「継承語教育」、「アメリカのバイリンガル教育」の枠組みを超えるような新たな補習校のモデルが期待される。



ポスター発表の様子



講演会の様子



西川朋美（お茶の水女子大学）

バイリンガルの子どもの言語習得:「できない」ことにも正面から向き合える年少者日本語教育を目指して